

『就実論叢』第50号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2021年2月28日 発行

# 日本語における動詞・形容詞の

## ていねいなかたちについて

－日本語教師のための日本語文法をもとめて－

**On Inflection Forms of the Polite Verb and Adjective in Japanese**

中 崎 崇  
城 田 俊

# 日本語における動詞・形容詞のていねいなかたちについて

－日本語教師のための日本語文法をもとめて－

On Inflection Forms of the Polite Verb and Adjective in Japanese

中 崎 崇 (表現文化学科)

NAKAZAKI Takashi

城 田 俊 (獨協大学)

SHIROTA Shun

キーワード：日本語文法、動詞、形容詞、丁寧形、語形、語形変化、活用

## 0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿は、中崎・城田(2017a)(2017b)(2018a)(2018b)(2019)(2020)に引き続き、日本語教育<sup>i</sup>のための新しい日本語文法教科書の作成を目指して、動詞及び形容詞のていねいなかたちについて、単語として文中においてどのようなかたちをもち、どのような意味をもって、どのようにつくられるのかといったことについて検討するものである。ていねいなかたちでも、肯定のかたちについてのみ扱い、否定のかたちについては別稿で扱う。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。

## 1. 動詞のていねいなかたち

動詞の語尾変化の体系については中崎・城田(2018b)で、否定のかたちについては中崎・城田(2020)で検討を行っている。肯定のかたちは子音語幹動詞であれば、語幹に -u、母音語幹動詞であれば、語幹に -ru といった語尾助辞をつけることにより形成される。それに対して、否定のかたちは、子音語幹動詞であれば、語幹助辞<sup>ii</sup>・ana(-i)、母音語幹動詞であれば語幹助辞・na(-i)をつけ、語幹を拡大することによって形成される。

### (1) I. 子音語幹動詞：書ク kak-u

書カナ(イ) kak・ana-i

### II. 母音語幹動詞：食ベル tabe-ru、見ル mi-ru

食ベナ(イ) tabe・na-i、見ナ(イ) mi・na-i

### III. クル、スル：来ル ku-ru、スル su-ru

来ナ(イ) ko・na-i、シナ(イ) si・na-i

これら動詞のかたちは、肯定のかたちであっても、否定のかたちであっても話し手の聞き手に対するていねいな態度があらわされていない。そのため、そのまま用いるとていねいではない感じが生じてしまう。これらにはていねいな態度を明確に表示するかたちが対応して存在し、聞き手にていねいな態度をとろうとする場合、これらを用いなければならない。

ていねいな態度を表示するためには動詞のていねいなかたちを用いる必要があり、この動詞のていねいなかたちは、語幹に語幹助辞マス・imas(-u) / ・mas(-u) をつけ、拡大することによって形成される。

### 1. 1. ていねい (マス) 語幹

ここでは、肯定のかたちに対応して存在するていねいなかたちの形成について述べる。

丁寧語幹を形成する語幹助辞についても、否定語幹を形成する語幹助辞と同様に、・imas(-u) / ・mas(-u) の2類が存在する。肯定のていねいなかたちは、それぞれ動詞の種類に応じて動詞の語幹を、語幹助辞・imas(-u) / ・mas(-u) で拡大することによって得られるていねい (マス) 語幹から形成される。ていねい (マス) 語幹は、I. 子音語幹動詞には・imas(-u)、II. 母音語幹動詞には・mas(-u) をつけることによって形成される。III. クル、スル<sup>iii</sup>については、ていねい語幹形成にあたって来ルとスルの語幹末母音はiとなり、どちらも・mas(-u) をつける。

- (2) I. 子音語幹動詞：書きマス kak・imas-u
- II. 母音語幹動詞：食べマス tabe・mas-u、見マス mi・mas-u
- III. クル、スル：来マス ki・mas-u、シマス si・mas-u

マスがついたかたちは伝統的には「汎用形」(連用形と伝統的に呼ばれる語形) にマスをつけてつくと解釈されている。しかし、本稿では語幹助辞・imas(-u) / ・mas(-u) によって形成されると考える。このように考えると・iは結合要素(語幹と助辞を結合させる要素)<sup>iv</sup>となり、マスも屈折的形態として把握できることになる。本稿では、このような把握で記述を進める。

・i mas(-u) / ・mas(-u) によって拡大された語幹はかたちの上で動詞となり、動詞性の語尾変化を行う。ただし、この新たな動詞は普通の動詞変化とは異なる諸特徴がある。ここでは6つの特徴を指摘しておく。

- ① マス・imas / ・mas は常に語幹の最末尾を形成する。(マスがあったら、そこで動詞の語幹を終了すると考えてよい)
- ② マス・i mas(-u) / ・mas(-u) には、これ以上語幹助辞をつけられず、当然ナイによ

でも拡大されない。それゆえ、マスは否定を示すために、後述する特別の語尾形（マセン）を用いる。

- ③ 「汎用形」（連用形）がない：
- ④ 命令形及び接続形（中止形、条件形、前提形、逆接形、例示形）の使用も限られる。

①と②については、語幹助辞マスの前には、他の語幹助辞、例えば使役語幹をつくる・*ase(-ru)* / ・*sase(-ru)* や受身語幹をつくる・*are(-ru)* / ・*rare(-ru)* などが現れ、食べさせられる *tabe・sase・rare・mas(-u)* といったかたちを形成する。マス語幹の前には他の語幹助辞が現れうるが、後には、\*食べマサナイ *tabe・mas・ana(-i)* のように、否定（ナイ）語幹・*ana(-i)* であってもつけることはできない。

③については、受身語幹や使役語幹の語尾活用は特別の制限がなく、「汎用形」についても、食べラレ *tabe・rare-φ* や食べさせ *tabe・sase-φ* のように見られる。しかし、マス語幹については、\*書キマシ *kak・imas-i φ*、\*食べマシ *tabe・mas-i φ* といった「汎用形」は存在しない。

④マス語幹は、動詞語尾助辞をとって語尾活用を行い、食べマセ *tabe・mas-e* といった命令形や接続形（中止形：食べマシテ *tabe・mas-ite*、条件形：食べマセバ *tabe・mas-eba*、前提形：食べマシタラ *tabe・mas-itara*、逆接形：食べマシタツテ *tabe・mas-itatte*、例示形：食べマシタリ *tabe・mas-itari*）といった語尾形を形成するが、これらの使用は限定的である。

- ⑤ 意志・勧誘形（ヨウ形）形成に当って、語幹末子音（語尾助辞末子音）*s-* は口蓋化され [ʃ] - となり、動詞語幹末子音の唯一の例外を構成する（口蓋化子音は動詞語幹末子音として、通常、存在しない）。
- ⑥ 主語に尊敬を示す下サル、ナサル、オッサル、イラッサル等々にマスがつく時、語幹末の *r* は通常脱落する。

⑥については、下サルであれば、下サリマス *kudasar・imas(-u)* となるところが、下サイマス *kudasa・imas(-u)* となり、イラッサルであれば、イラッサリマス *irassyar・imas(-u)* となるところが、*irrasya・imas(-u)* となり、語幹末の *r* が脱落する。

## 1.2. ていねい語幹の語尾変化

### 1.2.1. 非過去形（マス形）

マス・*imas(-u)* / ・*mas(-u)* は子音を語幹部末尾に持つ語幹助辞であり、これによって拡大された語幹は子音語幹になり、Iグループの子音語幹動詞と同様に非過去形の語尾として *-u* を選択する。

(3) : 書キマス kak・imas-u、食ベマス tabe・mas-u

マス形とはマス語幹の語尾変化の一つである非過去形のことである。語尾形の一つである非過去形のことである。マス語幹の意味で使ってはならない。

### 1.2.2. 過去形 (マシタ形)

語幹末部末尾が s であるため、I グループの子音語幹動詞と同様に過去形の語尾として -ita が選択される。I グループの動詞は、過去形の形成にあたって語幹末の子音に応じて変容がおこる場合があったが (例: 勝ッタ kat-ita > katta、飛ンダ tob-ita > tonda、書イタ kak-ita > kaita)、マシタ形においては、語幹と語尾の接合に当り、語幹の変容はおこらない。

(4) : 書キマシタ kak・imas-ita、食ベマシタ tabe・mas-ita

### 1.2.3. 意志・勧誘形 (マシヨウ形)

意志・勧誘形も、I グループの子音語幹動詞と同様に意志・勧誘形の語尾として -oo が選択される。-oo の接合を受けると、すでに記したように、語幹末の s は口蓋化し、[ʃ] となる。

(5) : 書キマシヨウ kak・imasy-oo、食ベマシヨウ tabe・masy-oo

動詞のヨウ形が、非対話的な環境 (心内発話・独和) で話し手の意志を表す (「表出」) 場合に用いられるのに対して、マシヨウ形はていねいなかたちという性質上、非対話的な環境では用いられない。

(6) : 明日は、山へ登ろう。(意志)

(7) : ?明日は、山へ登りましょう。(意志)

マシヨウ形は、動詞のヨウ形と同様に、推量の意味でも用いられることがある。

(8) : あすは 晴れましょう。(推量)

(9) : さぞ太郎も喜びましょう。(推量)

中崎・城田 (2018a) で述べたように、ヨウ形による推量は書きことば的となり、文体的にも古めかしいものとなるのに対して、マシヨウ形のそれはその制限がややゆるめられる。

#### 1.2.4. 命令形

命令形も、Iグループの子音語幹動詞と同様に命令形の語尾として -e が選択される。

(9) : 書キマセ kak・imas-e、食べマセ tabe・mas-e

しかし、命令形は、主語に対する尊敬を表す動詞 (nasa-ru 「ナサル」、irassyar-u 「イラッシャル」、kudasar-u 「下サル」、ossyar-u 「オッシャル」など) から形成される場合を除き、あまり用いられない。

(10) : : 下サイマセ kudasa・imas-e、イラッシャイマセ irassya・imas-e、  
ナサイマセ nasa・imas-e

「イラッシャイマシ」のようなマシというかたちが、下町の軽い丁寧なことばとして用いられることがある。

#### 1.2.5. 接続形 (中止形、条件形、前提形、逆接形、例示形)

接続形についても、それぞれIグループの子音語幹動詞と同様の語尾 (中止形 : -ite、条件形 : -eba、前提形 : -itara、逆接形 : -itatte、例示形 : -itari) が選択され形成される。

(11) 中止形 : 書キマシテ kak・imas-ite、食べマシテ tabe・mas-ite  
条件形 : 書キマセバ kak・imas-eba、食べマセバ tabe・mas-eba  
前提形 : 書キマシタラ kak・imas-itara、食べマシタラ tabe・mas-itara  
逆接形 : 書キマシタツテ kak・imas-itatte、  
食べマシタツテ tabe・mas-itatte  
例示形 : 書キマシタリ kak・imas-itari、食べマシタリ tabe・mas-itari

(12) そういう方々もおりまして、私共はそれなりに対応策の検討を急いでいるところ  
なのです。

(13) お帰りになりましたら、皆様によろしくお伝え下さい。

中止形や前提形など実際に使用されることはあるものの、先述のとおり、接続形の使用は限定的である。その理由として、文末のていねい語幹の語尾形のていねいの意味は、中止の用法の中止形にさかのぼることができるということが考えられる。

(14) 家に帰って、風呂にはいりました。

文末でていねいなかたちを使用すれば、接続形をていねいなかたちにせずとも原則的に事足りるため、接続形で用いる必要は特にないことになる。そのため、接続形の使用は限られ、一部では退化状態にある。特に逆接形は、文体的に話しことば的であり、丁寧さの表現たるマス語幹にあまりなじまず構造上存在するとしても、使用はまれである。

#### 1.2.6. 連体接続形（連体形）

「連体形」については、動詞では、主節が表すとき（主節時）を基準として、動詞が表す事柄の継起順序を表し分ける【順序】といった文法的意味を表し分ける語形が存在する。主節があらわすときよりも同時か後といったときを表す kaku「書く」といった「非以前形」と主節時よりも先であるといったときを表す kaita「書いた」といった「以前形」である。「以前形」は「叙述形」の「過去形」と、「非以前形」は「非過去形」と、語形とその作り方は同じである。

(15) 故郷におります母にかわってお礼申し上げます。

(16) まず胸にわきあがりました考えは、これはあぶないぞというものでした。

マスについても動詞と同様に連体接続形において、「以前形」と「非以前形」の2つの語形が確認でき、それぞれ「以前形」は「過去形」と、「非以前形」は「非過去形」と語形と作り方は同じである。

(18) 以前形：書キマス kak・imas-u、食ベマス tabe・mas-u

非以前形：書キマシタ kak・imas-ita、食ベマシタ tabe・mas-ita

マスの「以前形」と「非以前形」は、それぞれ機能上は、「非以前形」であれば、主節があらわすときよりも同時か後といったときを表し、「以前形」であれば、主節時よりも先であるといったときを表す。

(19) ハワイで買いました傘は、日本では使いませんでした。

(20) ハワイで買います傘は、日本では使いません。

(19) であれば、従属節の事柄（ハワイで [傘を] 買う）がなりたつのは、主節時（日本で [傘を] 使うといった事柄がなりたつとき）よりも前であることを表す。(20) であれば、従属節の事柄（ハワイで [傘を] 買う）がなりたつのは、主節時（日本で [傘を] 使うといった事柄がなりたつとき）よりも後であることを表すと解釈することは可能である。マスにお

いても、動詞と同様の【順序】といった文法的意味を表し分ける「非以前形」と「以前形」の2種が認められるということである。

しかし、1. 2. 5で述べたように、文末でていねいなかたちを使用すれば、従属節の述語をていねいなかたちにせずとも原則的に事足るため、マスの「非以前形」「以前形」を用いて【順序】といった文法的意味を表し分けることは特に必要なく、その使用は限定的であるといえる。

ていねい語幹の諸形は一度用いると、聞き手が異ならない限り、持続的に使われる性質を持つ。つまり、文体的な現れ方をする性質を持つ。(21)のように、ていねい語幹の諸語尾形に非ていねい(普通)語幹の諸語尾形を混ぜ込む文体的手法はそうとう習練が必要である。

(21) こういう席でこんなことを口にするのはよろしくないと思ひをひそめるような旧弊な方はいらっしゃらないと思いますので、敢えて申し上げますが、お二人の仲に将来どんなことが起らないとも限らない。そのときには、今夕、この席につらなって祝意を表したという縁で、どうぞお二人に友情を示し、いろいろ相談に乗ってやっていただきたいと願います。九谷オー『挨拶はむづかしい』朝日文庫(朝日新聞社)、1988、p.16 (一部現代かなづかいに改めた)。

表1 ていねい(マス)語幹の語尾変化

語幹		I. 言い切るかたち(完結形)				
		叙述するかたち(叙述系)		働きかけるかたち(呼び掛け形)		
		非過去形	過去形	意志・勧誘形	命令形	
I	kak・imas-	書キマス kak・imas-u	書キマシタ kak・imas-ita	書キマシヨウ kak・imasy-oo	(召シマセ) (mes・imas-e)	
II	tabe・mas-	食ベマス tabe・mas-u	食ベマシタ tabe・mas-ita	食ベマシヨウ tabe・masy-oo	(ナサイマセ) (nasa・imas-e)	
III	ki・mas-	来マス ki・mas-u	来マシタ ki・mas-ita	来マシヨウ ki・masy-oo		
	si・mas-	シマス si・mas-u	シマシタ si・mas-ita	シマシヨウ si・masy-oo		
語幹		II. 接続するかたち(接続形)				
		中止形	条件形	前提形	逆接形	例示形
I	kak・imas-	書キマシテ kak・imas-ite	書キマセバ kak・imas-eba	書キマシタラ kak・imas-itara	書キマシタッテ kak・imas-itate	書キマシタリ kak・imas-itari
II	tabe・mas-	食ベマシテ tabe・mas-ita	食ベマセバ tabe・mas-eba	食ベマシタラ tabe・mas-itara	食ベマシタッテ tabe・mas-itate	食ベマシタリ tabe・mas-itari
III	ki・mas-	来マシテ ki・mas-ite	来マセバ ki・mas-eba	来マシタラ ki・mas-itara	来マシタッテ ki・mas-itate	来マシタリ ki・mas-itari
	si・mas-	シマシテ si・mas-ite	シマセバ si・mas-eba	シマシタラ simas-itara	シマシタッテ si・mas-itate	シマシタリ si・mas-itari

## 2. イ形容詞のていねいなかたち

形容詞の語尾変化の体系については中崎・城田 (2019) で、否定のかたちについては中崎・城田 (2020) で検討を行っている。肯定のかたちは語幹に語尾助辞-iをつけ形成される。それに対して、否定のかたちは、赤クナイ aka-ku $\phi$ ・na-iのように形容詞を「汎用形」(連用形)に立て、ナイ na-iを後続させることでつくられる。

これに対し、イ形容詞のていねいなかたちは、非過去形・過去形にデス des-uを後続させることによって表される。否定のかたちも同様に、イ形容詞「汎用形(連用形)」に後続する補助形容詞<sup>vi</sup>の非過去形(ナイ)・過去形(ナカッタ)にデス des-uをさらに後続させる。

(22) 寒イデス samu-i des-u、寒カッタデス samu-katta des-u

(23) 寒クナイデス samu-ku na-i des-u、

寒クナカッタデス samu-ku nakatta des-u

このデス des-uは、今迄扱ってきた2種類の助辞(語尾助辞、語幹助辞)とは著しく異なり、非過去形、過去形に後続することができる。かつ、その後続の仕方は膠着的である。これは、自分の前で、非過去形と過去形の対立(時制の対立)を許す膠着的付属要素である。寒イ(寒クナイ)、寒カッタ(寒クナカッタ)という述語によって文が終結すると考えると、文の末尾に出現し、文全体の中に、話し手の態度を入れ込む働きを持つ。このような性質を持つ付属要素は、デス以外にダロウ、ヨウダ、ラシイ、ニ違イナイ、ソウダ(伝聞)カモシレナイ等があり、ノダもその性質を持つ。すでに中崎・城田(2017b)で、こういった実質的内容はなく、文法上の意味しか持たない付属要素を「述末詞」の名を付けた。「述末詞」は文に所属し、文全体にそれぞれが持つ文法意味を込めるものと考えられる。

### 2.1. デスの語尾変化

述末詞デスは動詞性の付属要素であり、動詞的語尾変化を行うが、言い切るかたちのうち、叙述するかたち(叙述形)しかつくり、他に対して働きかけるかたち(呼び掛け形)を持たない。また、接続形(中止形、前提形、逆接形、例示形)の使用もイ形容詞内包文においては活発でない。

(24) 中止形：寒イデシテ samu-i des-ite

前提形：寒イデシタラ samu-i des-itara

逆接形：寒イデシタツテ samu-i des-itate

例示形：寒イデシタリ samu-i des-itari

条件形(\*デセバ)「汎用形」(連用形)(\*デシ)、連体形(\*デス(人)、\*デシタ人)の

不在も指摘される。否定のかたちもない。

- (25) 条件形：\*寒イデセバ samu-i des-eba  
汎用形（連用形）：\*寒イデシ samu-i des-i  
連体形：\*寒イデス人、\*寒イデシタ人  
否定形：\*寒イデサナイ samu-i des・ana-i

以下、非過去形（デス形）と過去形（デシタ形）についてのみ述べる。

### 2.1.1. 非過去形（デス形）

述末詞デスの非過去形は語尾助辞 -u をつけ形成される。またイ形容詞の過去、非過去どちらを内包しても同様に形成される。

- (26) 海ガ美シイデス utukusi-i des-u（非過去内包のていねい文形非過去）  
海ガ美シカッタデス utukusi-katta des-u（過去内包のていねい文形非過去）

### 2.1.2. 過去形（デシタ形）

述末詞デスの過去形は語尾助辞 -ita をつけ形成される。またイ形容詞の過去、非過去どちらを内包しても同様に形成される。

- (27) 海ハ美シイデシタ utukusi-i des-ita（非過去内包のていねい文形過去）  
海ハ美シカッタデシタ utukusi-katta des-ita（過去内包のていねい文形過去）

デスが付加された文において、a. デシタ（非過去内包のていねい文形過去）と b. タデス（過去内包のていねい文形非過去）は構造上同義である。ただし、bの方が想起・回想を話し手がたたみかける感じがでる（aには、たたみかける調子にはならない）。また、過去内包のていねい文形過去（タデシタ）は構造上は存在するとしても現実の使用はまれであり、学習において無視できるつらなりである。

## 3. 動詞とイ形容詞のていねいなかたちの相違

動詞のていねいなかたち（マス）とイ形容詞のていねいなかたち（デス）は、意味・用法の上ではパラレル（平行）をなすが、形態の上では平行的ではない。

前者では、動詞の語義語幹にマス・imas(-u) / mas(-u) が接合し、ていねいの意味が語幹に付加され、2つがあわさって1つの複合語幹が形成され、それに語尾が接合し、全体があわさって1語となる。

それに対し、後者では、イ形容詞が述語となり、ひとまず文が終結し、それに「述末詞」が新たに後続し、文にていねいな態度が付加される。イ形容詞も語尾を持ち、「述末詞」も語尾を持ち、両者共各1語の資格を持つ。このような文のかたちをていねいな文形と呼ぶ。

(28) 書きマス kak・imas(-u) (1語)

寒イデス samu(-i) des(-u) (2語)

イ形容詞の非過去形・過去形を述語とするていねいな文形の文法上のかたちと意味を分析すると表4・5・6のようになる。動詞のていねいなかたちの非過去形・過去形のそれ(表2.3)と比較されたい。

表2 書きマスの文法的分析

	書	キ		マ	ス
	kak	・	i	mas	-u
かたち(形態素)	動詞 語義語幹 (子音語幹)	語幹助辞			語尾助辞
		結合母音	助辞本体(語幹)		
意味	語義の意味	ていねい			非過去・肯定
形成される単位	ていねい語幹(文法語幹)				語尾
	ていねい語幹(1語)の非過去形				

表3 書きマシタの文法的分析

	書	キ		マ	シ	タ
	kak	・	i	mas	-	i ta
かたち(形態素)	動詞 語義語幹 (子音語幹)	語幹助辞			語尾助辞	
		結合母音	助辞本体(語幹)		結合母音	語尾助辞
意味	語義の意味	ていねい			過去	
形成される単位	ていねい語幹(文法語幹)				語尾	
	ていねい語幹(1語)の過去形					

表4 寒イデスの文法的分析

	寒	イ		デ	ス
	samu	-	i	des	-u
かたち(形態素)	イ形容詞 語義語幹	語尾助辞	述末詞		
			述末詞本体(語幹)		語尾助辞
意味	語義の意味	非過去	ていねい	非過去	
形成される単位	イ形容詞非過去形(1語) (非過去を表す文が終結する)		述末詞非過去形(1語) (文にていねいな態度を込めると共に過去を表わさない)		
	イ形容詞非過去形を述語とするていねいな文の非過去形				

表5 寒カッタデスの文法的分析

	寒	カッ	タ	デ	ス	
	samu	-	kat	ta	des	-u
かたち(形態素)	イ形容詞 語義語幹	語尾助辞		述末詞		
		結合要素	助辞本体	述末詞本体 (語幹)	語尾助辞	
意味	語義の意味	過去		ていねい	非過去	
形成される単位	イ形容詞過去形 (1語) (過去を表す文が終結する)			述末詞非過去形 (1語) (文にていねいな態度を込めると共に過去を表わさない)		
	イ形容詞過去形を述語とするていねいな文の非過去形					

表6 寒イデシタの文法的分析

	寒	イ	デ	シ	タ	
	samu	-i	des	-	i	ta
かたち(形態素)	イ形容詞 語義語幹	語尾助辞	述末詞			
			述末詞本体 (語幹)	語尾助辞		
				結合母音	語尾助辞	
意味	語義の意味	非過去	ていねい	過去		
形成される単位	イ形容詞非過去形 (1語) (非過去を表す文が終結する)		述末詞過去形 (1語) (文にていねいな態度が込められると共に過去を表わす)			
	イ形容詞非過去形を述語とするていねいな文の過去形					

文の末尾に頻出するマスとデスは語幹末子音として s を共通に持つことは興味深い。想起されるのは、子音語幹動詞のうち、-ita (i は子音語幹に語尾の本体 ta を結びつける役をはたす結合要素) のような t を頭を持つ語尾助辞の接合を受けながら、唯一語幹と語尾に変容をもたらさないのは、「貸す kas-u / 貸した kas-ita」のような s を語幹末に持つものである(中崎・城田 (2018b) 参照)。変容を起こすと文法的把握がしにくくなり、それを避けるために s が選ばれていると考えられる。形態音素論上の論理が働いているように思われ、偶然として処理できないものがある。

#### 4. まとめ

これまで、動詞および形容詞のていねいなかたち、特に肯定のかたちについて、主にそのかたちのつくりかたについて検討してきた。確認したように、動詞と形容詞のていねいなかたちは、意味・用法の上ではパラレルをなすが、形態の上では平行的ではない。動詞がマス・imas(-u) / mas(-u) といった語幹助辞により語幹を拡大させるのに対して、形容詞はその過去形・非過去形に「述末詞」des(-u) を後接させ、それぞれのかたちをつくる。両者のかたちのつくりかたは、大きく異なる。

本稿では動詞および形容詞のていねいなかたちの否定のかたちについては言及できなかった

た。このことについては別稿で述べる予定である。

## 5. 参考文献

城田 俊 (1998) 『日本語形態論』 ひつじ書房

中崎崇・城田俊 (2017a) 「日本語における語の構成をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第11号、pp.1-13、就実表現文化学会

中崎崇・城田俊 (2017b) 「日本語における語の認定と品詞分類をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第46号、pp.63-76、就実大学就実短期大学

中崎崇・城田俊 (2018a) 「日本語における動詞のヨウ形・汎用形（連用形）・連体形の意味用法をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第12号、pp.62-45、就実表現文化学会

中崎崇・城田俊 (2018b) 「日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第47号、pp.39-55、就実大学就実短期大学

中崎崇・城田俊 (2019) 「日本語における形容詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第48号、pp.43-61、就実大学就実短期大学

中崎崇・城田俊 (2020) 「日本語における動詞・形容詞の否定のかたちについて－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第49号、pp.53-71、就実大学就実短期大学

三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版

---

<sup>i</sup> 本稿での日本語教育とは、日本語非母語話者に対する日本語教育に限らない。日本語母語話者に対する、いわゆる国語教育も含む。以後断らない限り、この意で日本語教育という用語を用いる。また日本語教師についても、非母語話者、母語話者に対する日本語教育を行うものといった意味で用いる。

<sup>ii</sup> 語幹助辞とは、屈折要素（助辞）の1種で、語幹に融接して新たな文法上の語幹を形成する助辞のことをさす。書カセル／タベサセル (kak・ase-ru/tabe・sase-ru) 書カレル／タベラレル (kak・are-ru/tabe・rare-ru) などにおける下線部が語幹助辞である。

<sup>iii</sup> IIIグループのクル、スルは本質的にはともに母音語幹動詞であるが、その母音は *sita* 「した」、*suru* 「する」、*seyo* 「せよ」、*kita* 「来た」、*kuru* 「来る」、*koi* 「来い」のように変化し、その母音は [i~u~e]、[i~u~o] のように特定されていないものである。

<sup>iv</sup> 正確には、結合母音（結合要素のうち母音であるものを結合母音と呼ぶ）となる。

<sup>v</sup> 本稿では、なにもつかないといったあり方の助辞、つまり - $\phi$  (ゼロ) とった語尾助辞を認める。この - $\phi$  (ゼロ) を汎用形（連用形）形成のための助辞本体であると考ええる。詳しくは

中崎・城田（2018b）を参照されたい。

<sup>vi</sup> 動詞のナイ・ana-i/・na-i（書かない kak・ana-i、食べない tabe・na-i）は、\*書かはない\*書きはない（kak-i $\phi$  wa・na-i）のようにとりたて助詞を入れ込むことができないことから、語幹助辞である。形容詞のナイ na-i は、美シクハナイ（utukusi-ku $\phi$  wa・na-i）のようにとりたて助詞を入れ込むことができ、1語と考えられ、このようなナイを補助形容詞と呼ぶ。詳しくは中崎・城田（2019）を参照されたい。